

核兵器廃絶情勢

被爆75年 2020年に向けて

8月7日からの原水爆禁止世界大会（長崎大会）への参加に向けた東京土建代表団の結団式（7月30日開催）で、原水爆禁止東京協議会（東京原水協）事務局長の吉田孝喜さんが、「核兵器廃絶をめぐる情勢と2019年世界大会そして被爆75年2020年へ」と題して講演しました。その一部を、紹介します。（文責・見出しとも編集部）

核兵器禁止条約（以下禁止条約）は2019年1月10日、新たに1カ国増えて70カ国が署名しました。批准国は23カ国になりました。70カ国は必ず批准しますので、大きな意味を持っています。たぶん署名国も増えていくでしょうし、批准国も増えていき、2020年あるいは2021年には発効するだろうといわれています。その分岐点が来年のNPT（核拡散防止条約）再検討会議です。

2018年の12月に国連総会で禁止条約の署名と批准を呼びかける決議が採択され、未署名・未批准のすべての国に署名と批准を呼びかけました。53カ国が共同提案国になり、126カ国が賛成で採択されました。反対したのは核保有国のP5（米露英仏中）、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮、NATO諸国の29カ国、オーストラリア、日本、その他で41カ国です。

4月29日から5月10日まで、NPT再検討会議準備委員が開かれ、議長報告では、

開発が発表されました。核保有国のP5は昨年10月、国連総会の第一委員会、禁止条約に対して支持も署名も批准もしないと声明を発表。NPT準備委員会でもP5は、禁止条約はNPTと矛盾し、NPTを弱める危険があり、これには反対であると表明しています。

政府の「橋渡し」は破たん

安倍首相は禁止条約に公然と背を向け、「唯一の戦争被爆国としてこれらの国々の間の橋渡しを行ない、双方の協力を通じて核兵器のない世界に向けて一歩一歩近づいていく」と言っていますが、日本

政府の「橋渡し」路線は完全に破たんしています。核使用の賛成派と反対派の「橋渡し」はあり得ません。

ヒバクシャ国際署名の推進が禁止条約の圧倒的世論をつくってききました。国際署名がなかったら、禁止条約はできませんでした。それは被爆者が世界に存在するということが国際署名によって知らせてきたからです。

今年、ヒバクシャ国際署名を941万人分、NPT準備委員会に被団協として提出しました。国連事務次長の中満泉さんはNPT締約国の代表へ、941万筆を超える声を真摯に受け止め、誠実に、確実に核軍縮のための対話と交渉に臨んでくださいと呼びかけました。

昨年の世界大会に参加 大平さん親子(板橋)



おりづるタワーから見下ろした原爆ドーム



大平さん親子。左から華奈さん（次女）、沙知さん（長女）、友美さん（次女）

板橋支部主婦の会事務局次長の大平友美さん。昨年（2018年）、広島で行なわれた原水爆禁止世界大会に長女の沙知さんと参加しました。

「板橋区では『中学生平和の旅』（※注1）という事業があって、それにお友だちが立候補したにも関わらず、たまたまで、沙知が『一度行ってみたい』と言っていました。祖母は戦争体験者だったので、『思い出すと辛いから』と言って当時のことを話してくれませんでした。私も知らないことが多かったのです。

印象的だった 原爆ドーム

広島では、大会の全体会、分科会に参加し、原水協の方のガイドで市内を回りました。「原爆ドームの周りにも瓦礫（がれき）が落ちていて、こんなに被害があったんだと怖かったです」（沙知さん）、「おりづるタワー（※注2）から見下ろした原爆ドームは今まで見たものと全く違っていました。

「原爆ドームの東90mの位置に隣接してドームや平和公園を一望できる

が、沙知をどこかに連れて行って、過去の事実を見せた方がいいのかなと思いましたが、自分で連れて行くつもりで費用のことなどを聞いていたら、支部の方たちが動いてくれて会議にも提案され、代表にしてくださいとお願いしました。1年経った今、思っています。「親子で原水爆禁止世界大会を体験して、広島、長崎の原爆被害のこと、あるいは戦争の悲惨さについて考える東京土建の仲間が増えてくれるといいなあ」と。

※注1・次代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える目的で板橋区が実施している事業。毎年、区立中学生が広島、長崎に派遣され、平和式典や広島市、長崎市主催の平和事業に参加している。

※注2・原爆ドームの東90mの位置に隣接してドームや平和公園を一望できる



鳩ノ巣付近を行進する清水さん（横断幕中央）

今尚歩き続ける通し行進者

西多摩の清水梅夫さん

7月18日、檜原と奥多摩の2カ所から、2019年国民平和大行進の西多摩コースがスタート。東京土建西多摩支部では、檜原村にある甲武トンネルで山梨から引き継ぐ秋川流域組と、奥多摩町役場から出発する多摩川流域組に分かれ、7月20日の福生公園での集結集会に向け、3日間の行進に参加して核兵器廃絶を

訴え平和をアピールします。この日、出発地点の奥多摩町役場には22人（うち東京土建6人）が集結。そのなかには、14年前に北海道・東京間コースに、東京土建で初めて「通し行進者」として参加した清水梅夫さん（西多摩・石工・76歳）の姿が見られました。

61年前に始まった平和行進

は、全国11の幹線コースの各区間を平和をアピールしながら歩く取り組みで、通し行進者はコースを完歩するいわばシンボリック的存在です。

82日間で礼文から東京まで

2005年5月7日、気温零度の日本最北の島・礼文島を清水さんはみぞれ降るなか



奥多摩の河村町長（左）から激励を受ける清水さん（2005年当時）

出発。青森、秋田、山形、新潟、長野、山梨を経て、ゴール地点の上野東照宮まで82日間歩き続けました。

「体力的にも、被爆60年を記念する意味でも、参加するのには一番いい機会だと思っ」と当時、地元紙の取材に答えています。「お酒がおいしいところばかりだったので最高でした」とも。

通し行進中の思い出をたずねると、新潟県加茂市を訪れた際、当時の小池市長に「一緒に9条を守りましょう」と言われたことがものすごく印象的だった、という答えが返

ってきた。その頃はほとんど9条問題が深刻ではありませんでした。多くの首長と会ったなかで、あれほど通し行進を守りたいと発言した人は珍しかったからだろうです。

ある健脚の清水さんですが、通し行進の2年後、仕事中に8メートルの高さから落下する事故に遭います。背中から落ちて腰と脚を大怪我したため、しばらくは歩くことができなくなりました。

それでも怪我の回復に合わせ、少しずつ歩ける距離だけでも歩き、毎年参加するようになっている清水さん。憲法9条が脅かされている現状を打破するため、「やっぱり少なくとも歩かなきゃ」と笑顔で話し、終点の御岳駅までの12kmを完歩しました。